

光のイベントの 楽しみ方

ディスプレイデザイナー
千葉 淑子



何かと家に閉じ籠りがちなこの季節。そんな時期に街を彩るイルミネーションは、外へ出掛ける楽しみのひとつですね。日暮れが日増しに早まる11月初旬から、街は徐々にクリスマスの装いに変わります。それと同時に、街路樹や建物の外壁にも趣向を凝らした光の演出が施されていきます。街が最も華やかな姿になる時です。見事なイルミネーションを見ると、ディスプレイデザイナーという仕事柄、ついつい仕事目線で見えてしまいがちですが、光の通りを歩いていると、やはり心躍らずにはいられません。思わず立ち止まっては、他の人たちに混じってカメラをパチリ。寒さの苦手な私ですが、光の誘惑には弱いもの。雪道の足元も疎かに、上を見上げては、光の散策を楽しんでしまいます。そう、イルミネーションってなんて冬の季節が似合うのでしょうか！

さて、このイルミネーションという言葉、今ではすっかり馴染みのものとなりましたが、日本で一般的になったのは、ここ20年程でしょうか。札幌ではお馴染みの「さっぽろホワイトイルミネーション」は、中でも歴史が古く、次回で30回目を迎えます。今日では、各地に名称のついたイルミネーションが行われ、冬の風物詩になりました。この冬もあちらこちらで競うかのように見事な演出がなされ、有名所の点灯式が、多くのメディアに取り上げられていました。イベント期間中、何万人の人が訪れるとか、何万個の電球が使われているとか、多くの数字がいくつも並び、それが一層“見に行ってみたい”気分をあおります。

この冬、特に話題になったのが、11年ぶりに復活した東京、原宿・表参道ケヤキ並木のイルミネーションでした。表参道のそれは、今程イルミネーション

がポピュラーではなかった1991年にスタート。全国的に知られるイベントとなりましたが、年々増加する見物人による環境の悪化が深刻化。とうとう近隣の住人達からの要望により、98年を最後に中止となったものです。当時、その報道にがっかりしたのを覚えています。そのNOといていた住民達から、この未曾有の不況の中、少しでも人々に明るく元気になってもらいたいという声上がり、「表参道 H.I.S.イルミネーション ベルシンフォニー」の名称で復活となったのです。そう、イルミネーションには、まさに人の心までも明るくする効果がありますね。

最近の傾向としては、エコの観点から相まって白熱球からL.E.D.ライト (Light emitting diode/発光ダイオード) に移行しつつあります。L.E.D.ライト自体は、価格的にはまだ高価なもの、消費電力は、白熱球のそれとは1/3から1/5ほど。耐久性も高く、永い目で見ると地球にも懐にもやさしい光と言えます。ディスプレイをする上でも、電球が割れる心配もなく扱っても容易となりました。またライト自体に熱が発生しないため、装飾物との接触でおきる火事などの心配もなく、安心して使うことができます。光の色彩も年々新色が開発され、最近では、パステル調のものも発売されました。ただL.E.D.の光は、見え方が硬く、クールな印象があります。もちろん設置するプランにもよりますが、その光が似合う場所とそうではない場所とがありますね。東京などの都会的で直線的な環境には、クールなL.E.D.ライトがとてもよく似合いますが、私としては北海道のような寒い地域では、温かみのある演出が似合うと思っていますので、白熱球のような光の方が似合う気がします。特に市街を走る車の窓から流れる光の河を

見ていると、それが顕著に感じられるから不思議です。光の見え方と街並は、重要な要素といえます。

パリの凱旋門前の街路樹のイルミネーションは、世界的に有名ですが、やはり最近のエコの流れから使用するライトがL.E.D.に移りました。変わった当初、美的感覚にうるさいパリっ子達は、その光が街並に合わない和不評だったそうです。しかし、最近の温暖化の影響で冬でも寒くなくなり、クリスマスらしくないと寂しい思いをしていたので、見た目にクールな印象のL.E.D.が好印象に変わったとか。面白いエピソードですね。

明かりのイベントと言えば、なにも電気ばかりではありません。炎の灯りは、何とも言えない安らぎを感じさせます。北海道では、「小樽雪あかりの路」が代表格ですが、私も参加している「紙袋ランタンフェスティバル in たきかわ」をちょっとご紹介します。本当に手づくりの市民参加型のイベントで、一人ひとりの個性が伝わる温かなイベントなんですよ。

商店街の空洞化は、どこの地方都市でも抱えている問題ですが、滝川も同じ悩みを抱えていました。そこで、中心市街地の活性化を目的とした光のイベントとして、滝川出身の彫刻家でデザイナーの五十嵐威暢氏の発案でスタートしました。毎年2月下旬に行われるそれは、今回で8回目を数えます。一般の市民が、紙袋に思い思いのアイデアで切ったり貼ったり。それを、ランタンとして街中に飾るので。事前にランタン制作のワークショップを行うなどして、当日使うその数6000個余り。それを商店街

にずらーっと並べ、中にロウソクを灯していきます。そして点灯時間は、わずか2時間半！まるで淡雪のごとく儂くも、幻想的なお祭りなんです。いつもは人通りの少ない日没後のアーケード街を、自分の作品を探しながら見て回る人々が行き交うのです。滑る雪道を気にしながら擦れ違う人と道を譲り合うと、思わずお互い声を掛け合ってしまう。本当にシンプルなイベントですが、なかなかどうして、作品がみんな力作揃い。商店街自体が、ひと時の市民ギャラリーと化すのです。私も自分の作品を探し歩いているうち、おおーっと思わず唸ってしまうほどの名作ばかり。思わず微笑んでしまう作品にも出会います。どの家庭にもある紙袋が、アート作品になる。“誰もがアーティスト”を実感するフェスティバルです。

確かに北国の冬の夜は長い。でもそれは、こんなにも人の心を温かくしてくれる楽しみが、味わえるということでもありました。光のイベントの楽しみ方は、お洒落をして出掛け、華やかさを堪能するもよし、仲間と共に連れ立って、温かさを感じるもよし、ですね。

千葉 淑子 (ちば よしこ)

| | |
|---------|------------------------------------|
| Profile | |
| 1988年 | 北海道教育大学札幌校教育学部特設美術課 卒 |
| 1988年 | 株式会社吉田プロジェクト 入社 |
| 1991年 | (株)日本ディスプレイ協会 ディスプレイデザイン賞入選 以後毎年入選 |
| 2000年 | 株式会社吉田プロジェクト 退社 |
| 2002年 | 有限会社ビーンズデザイン設立 同社代表取締役 |
| 2006年 | (株)日本ディスプレイ協会 ディスプレイデザイン賞地域特別賞受賞 |



紙袋ランタンフェスティバル in たきかわ